

南北朝・室町期における朝鮮観の中心思想

—「朝鮮通信使」善隣友好観批判をかねて—

金 光 哲

はじめに

室町時代を朝鮮と日本の関係史の観点から見て、「善隣と友好」の時代と定義する考えがある。例えば、姜在彦氏は「室町・江戸時代の善隣関係」⁽¹⁾において、

少なくとも一四〇四年に両国に交隣関係がはじまって、一五九二～九八年の豊臣秀吉による朝鮮侵略の時期を除いて、一八六七年末に徳川幕府が大政奉還し、王政復古がなされるまでは、じつに四百数十年にわたる交隣と交流の歴史があった。

とし、「交隣＝善隣関係の歴史」とする。

また、仲尾宏氏の「室町時代と朝鮮王朝」⁽²⁾は、「もうひとつの善隣友好の時代」の副題をにかけている。

江戸時代を「善隣友好の時代」とみる見解は、今や通説の感があるから、室町時代から江戸時代末期に至る「四百数十年間」の歴史は、秀吉の朝鮮侵略の「一時期」を除外して、「善隣と友好」に彩られた時代ということになる。

この史観に立てば、三十六年間の日本の朝鮮に対する植民地時代また、室町以降、江戸時代を含めた「善隣と友好」の流れの中で起きた、「不幸な一時期」となる。

南北朝・室町期に限定して、この時代が「善隣と友好」の時代であるとする観点に立てば、室町幕府に対する次の評価につながる。辛基

秀・村上恒夫共著『儒者姜沆と日本』⁽³⁾に、

それまでの日本の公家外交は、架空の神話伝承の神功皇后の「新羅征伐」以来、朝鮮は日本に朝貢すべきだという伝統的な考えに固執し、国際関係は無きに等しいものであった。

公家外交を接收した足利幕府は、外交政策の一大転換をなしとげ、朝鮮に対する誤った認識、「上古は来朝の貢賦であった」を正した。

とあるように、室町幕府が「伝統的」朝鮮観を正した、と評価することによって、室町時代を朝鮮観の「一大転換」期であるとする。

この室町時代が「善隣友好」の時代であり、朝鮮観が正された「一大転換」期とする見解は重要な論争点となるべき問題点である。

結論を先にいえば、本稿は全く逆の立場に立つことになる。南北朝および室町時代は、鎌倉末期に集大成された「新神功皇后譚」が、日本のすみずみまで浸透し、定着を見た時期であった。この「新神功皇后譚」をベースに形成された「朝鮮観」を、「新神功皇后的朝鮮観」と定義する。この「新神功皇后的朝鮮観」の定着こそが、この時代の中心内容であり、思想的核心である。この観点にたって初めて、豊臣秀吉の朝鮮侵略も、南北朝・室町期の連続性の上で、統一的な解釈が可能となる。

注

(1)『季刊 三千里』37号、三千里社

- (2)『季刊 青丘』8号、青丘文化社
 (3)『儒者姜沆と日本』、明石書店

第一章 南北朝期の朝鮮観

(1) 尊氏と源氏と八幡大菩薩

元弘三年（一三三三）四月二十九日、足利尊氏が北条政権への反旗を公にして、「篠村八幡宮」に奉納した「願文」⁽¹⁾は、

右八幡大菩薩者、王城之鎮護、我家之廟神也。

で始まるものであった。

足利氏は、河内源氏の始祖・源頼信の孫、八幡太郎義家を祖父とする義康が、下野荘足利に居を定めたのに始まる。永承元年（一〇四六）、菅田山陵（応神陵）に対する「源頼信告文」⁽²⁾に、

倣^{つしん}奉^{あきら}三媛^ノ先祖之本系^ノ者、大菩薩之聖跡者、忝^{はづか}廿二世之氏祖也。

とするように、頼信は応神天皇「廿二世」の子孫であるとした。先祖の「勲功」について、

上古者、大菩薩之母后神功皇后、奔^ハ波海上、罰^ハ西国之敵。高^ハ功朝家、撰^ハ政天下、御宇六十九年也。……

と、なによりも「神功皇后」を強調した。

足利氏の「八幡大菩薩」崇拜については、南北朝の初期、足利幕府の禅宗保護政策を非難する「延暦寺」も、次のように理解⁽³⁾していた。

抑源家者、被^レ寄^二氏^一於八幡、令^レ開^二運^一於萬代。然大菩薩者、異国降伏之明神、日域尊重之宗廟也。

南北朝期、公家の側からは例えば『愚管記』⁽⁴⁾で、源氏を「武家」と表現したが、武家「源氏」は「嵯峨源氏」に始まり清和源氏・陽成源氏等、十七流があるが、そのうち、河内を根拠地にし、源頼信の流れを組む一系が、「八幡大菩薩」を「我家之廟神」として、「源氏廿二世之氏祖」として、精神的・思想的支柱として、崇拜した。

また、この一系が鎌倉幕府や足利幕府をうち立て、政権を担ってきたという事実を忘れてはならない。「八幡大菩薩」が、足利幕府の「我家之廟神」として、「神功皇后」の「三韓征伐」と密接に連動し、「異国降伏」の「武神」として尊宗された、という側面を今まで見過ごされてきた。

さて、建武四年（一三三七）十一月十五日、足利尊氏は「忌宮神社」（山口県下関市長府）に、二首の「法楽和歌」⁽⁵⁾を奉納した。この題詞に、

西国下向之時、参^ニ詣^ハ長門国神^(ツツ)宮^(ツツ)皇后之社壇。帰洛之後、不^レ経^二幾日^一、一天得^ニ静謐^一之時、四海属^ニ無為之化^一。仍以^ニ二首篇詠^一、備^ニ一心之法楽^一矣。

とあって、これによって、前年の建武三年一月十一日、京に攻め上ったものの、後醍醐天皇軍に敗退し、弟直義も同行した兵庫から九州への「西国下向」の途次、「忌宮神社」に参詣したことが判明する。

この年三月、九州筑前多々良浜において、菊池武敏軍との戦いで勝利したが、『梅松論』⁽⁶⁾下によれば、「香椎宮」（祭神、神功皇后・仲哀天皇）を通過するとき、神人が、

殊当社は新羅征伐の昔、神功皇后椎木に御手をふれられけるに依て、香ばしかりしゆへ香椎宮と申也。

といって、「杉の枝」を尊氏の鎧の袖につけた。尊氏は「神の御加護」といい、「軍勢ども勇の色をぞ顕し」という。

四月に一転反攻に移り、後醍醐天皇に軍事的勝利をおさめた足利尊氏は、十一月七日「建武式目」を制定し、足利幕府が発足した。尊氏にとって、この「天下静謐」かつ「四海無為」は、「忌宮神社」参詣後「不経幾日」して、祭神・神功皇后によってもたらされたもの、と認識されたものであった。

康永三年（一三四四）十二月、尊氏の弟直義

が「忌宮神社」に奉納した「二首和歌」⁽⁷⁾の題詞に、

神功皇后者、本朝鎮護之大廟、外国降伏之
靈祠。先年参詣之時、中懷祈願之趣、玄応
太速、冥助揚焉。因致一心懇信、詠二
首和歌。

とある。この「先年」が、「西国下向」時か、
翌年の建武四年時か、また、それ以外かわから
ないが、直義は「本朝鎮護之大廟、外国降伏之
靈祠」である「忌宮神社」に、祈願達成の「冥
助」に依って和歌を奉納した。

また同日、尊氏の武将として活躍し、直義と
も交わりのあった斯波高経も「二首和歌」を奉
納したが、「当社者、八幡降誕之母后、三幹^(マツ)
征罰之靈神也」と強調した。

このように、足利幕府は、神功皇后に「天下
静謐」と「四海無為」の「冥助」に感謝して始
まった。

注

(1) 京都府亀岡市文化資料館蔵

この願文については、今枝愛真「丹波篠村における
足利尊氏の挙兵とその願文」(『史学雑誌』七〇一一)
において、江戸時代前期成立説が主張された以降、
これに基づいて日本古典文学大系『太平記』は偽作
説をとる。

しかし近年、上島有「篠村の高氏願文偽作説に対す
る疑問」(『日本歴史』四三三)、藤本孝一「足利高
氏の二つの願文と篠村八幡宮」(『日本歴史』四四八)
において、少なくとも「花押」が尊氏(高氏)もの
であることが確認された。

(2) 『大日本古文書』家わけ第四、石清水文書之一、
東京大学出版会

この「源頼信告文」によって、頼信「清和源氏」説
に疑義がとなえられ、「陽成源氏」説が主張されも
するが、本稿の趣旨とは関連しない。

(3) 「山門噉訴記」、大日本古記録『後愚昧記』一、
岩波書店

(4) 『増補 史料大成』続編、『愚管記(後深心院関
白記)』、臨川書店

(5) 防長古文書第一編之一「忌宮神社文書」、『防長史
学』付録、防長史談会、昭和七年

(6) 『群書類従』第二十輯、続群書類従完成会

(7) 注(5)参照

(2)「諏訪大明神絵詞」と足利尊氏

信州諏訪神社縁起の『諏訪大明神絵詞』⁽¹⁾(以
下、「絵詞」)の絵は、現存しない。しかし、諏
訪明神の「化現」は一卷・縁起上の詞書によれ
ば、「仁王十五代神功皇后元年」のこととする。

この年、新羅への途中、神功皇后が肥前の松
浦川で鮎占いをしたとき、諏訪明神は住吉明神
とともに、神功皇后の前に出現する。十月「諏
訪住吉二神、穀葉松枝の旗をあげて先陣」にな
って、新羅に向かった。

先、干珠をなぐれば、滄溟皆ひかたとなり、
異賊悦て陸地にとりあがりて、戦を致せば、
官軍弥勝にのる。其後又、満珠をなぐれば、
凶賊皆海底に沈む。……新羅王の云、是只
事にあらず。海東に国あり、日本と云。聖
王あり、天皇と号す。其国の神兵なり。兵
をあげてふせぐべからずとて、彼王自面縛
せられて帰降す。又士卒凶籍宝貨捧て、皇船
の前に蹲踞す。加之、毎年の朝貢をこたり
なく、本朝の皇化に随べき由、頭をたゝる
て懇に誓をなす。

続いて、

是を則見聞して、高麗百済の二王いまだ戦
かはざるに帰伏す。誓約趣如^レ前。又三韓
の中間寛巖山に、五丈の黒き巖あり、高良
大菩薩御弓の筈にて、碑文を^{三韓王氏は日本大也。云々。}書
給。

とある。「奥書」に、

右依^二御敬神^一被^レ下^二宸翰外題^一之間、
為^二後證^一、謹加^二奥書^一而已。

延文元年^{丙申}十一月廿八日

征夷大將軍 正二位源朝臣尊氏。

とあり、円忠の跋文に、

今上皇帝悉下外題宸翰。征夷將軍敬記^二全
部之奥書^一。

とあるように、延文元年(一三五六)の成立で、
時の後光厳天皇が「外題」を書き、足利尊氏が
直接各巻ごとに「奥書」を書いている。

「願主」は「当社執行法眼円忠」である。円忠は跋文に、「円忠苟繼_二神氏之遺墨_一」とあるように、諏訪「大祝家神氏」の出で、「大祝本神氏系図」⁽²⁾によれば、「諏訪大明神」を「大名持命第二子、御名方富命是也」とする。諏訪氏は、「絵詞」にこの神の「化現」を、「神功皇后元年」とするように、なによりも神功皇后の「三韓征伐」に参戦したことに、自己の権威の根源を求めた。「大祝本神氏系図」に、

既三韓征伐之日、吾親護_二皇旗_一、而向_レ之。
と創作されており、「絵詞」第四に、

凡我神、三韓征罰の曩意未忘れ給はざれば、
神氏武勲の業、永世相承左右にあたわざる者歟。

とあるように、諏訪氏にとって、「三韓征罰」の「曩意」（初志）こそが、諏訪氏存在の出発点であり、「三韓征伐」への参戦の虚構が、円忠にとって「神氏武勲の業」として、認識されたものであった。だからこそ、円忠が「絵詞」制作に際し、洞院公賢に対して行った質問書「円忠送篇目」⁽³⁾に、

一、神功皇后攻異朝之時、殘兵船於鯢海事。
の項目を設定して、質問したのである。

「三韓征伐」時、諏訪明神と住吉明神が一对として語られる。南北朝期、尊氏側に立って書かれた既述の『梅松論』に、

同十五代神功皇后、みづから將軍として、諏訪住吉の二神相伴ひ給ひて、三韓を平げたまふ。

とあり、室町期の『類聚既驗抄』⁽⁴⁾、「諏訪并住吉大明神」に、

昔神功皇后責_二新羅_一之時、二神船ノトモヘニ立給テ、奉_二守護_一云々。其内一神ヲバ、信_之⁽⁷⁷⁾国諏訪郡ニ奉_レ崇_レ之。為_レ鎮_二守護東国_一。此号_二諏訪大明神_一。一神ヲ摂津国住吉郡奉_レ崇_レ之。為_レ降_二伏異国_一之。神社奉_レ向_二異国_一。

とある。

諏訪・住吉二神の「三韓征伐」参戦説は、なにも南北朝期に、初めて主張されたものではない。鎌倉時代の十三世紀半ばには、現行の形になったと思われる『平家物語』⁽⁵⁾巻十一・「志度合戦」に、

むかし神功皇后、新羅をせめ給ひし時、伊勢大神宮より二神のあらみさきをさしそへさせ給ひけり。二神御船のともへに立って、新羅をやすくせめおとされぬ。帰朝の後、一神は摂津国住吉のこほりにとゞまり給ふ。住吉の大明神の御事也。いま一神は信濃国諏訪のこほりに跡を垂る。諏訪の大明神是なり。

とあり、先の『類聚既驗抄』の記事は、これに依拠したものであろう。

また、正安二～三年（一三〇一～二）の成立とされる『八幡愚童訓』⁽⁶⁾乙・下「仏法事」に、
諏訪の南宮は、神功皇后の征夷追罰の時、
諏訪の大明神、大將軍として打平給けり。
其時、皇后に近付奉て誕生し給南宮也とぞ申ける。

とあって、「大將軍」として参戦したとされている。このように、「諏訪神」と関連したフィクションが、鎌倉末期から南北朝・室町期にかけて巷間に広く流布した。

さて、円忠は、「奉行」として足利尊氏に仕え、天龍寺造営では、監督⁽⁷⁾の任にあたっている。尊氏が師事した夢窓国師と深い親交を結んでおり、延文三年四月に死んだ尊氏の葬儀について、洞院公賢に意見をたづねている。「絵詞」制作には、当時の一流の書家および絵師が従事しており、制作が尊氏のバックアップのもとに、推進されたものであることを推測させる。

注

- (1)『統群書類従』第三輯下、統群書類従完成会
- (2)金井典美『諏訪信仰史』、109 ページ、名著出版
- (3)史料纂集『園太暦』第五冊、統群書類従完成会
- (4)『統群書類従』第三輯下
- (5)日本古典文学大系、岩波書店

(6) 日本思想大系『寺社縁起』、岩波書店

(7) 『群書解題』神祇部、統群書類従完成会

(3) 『太平記』と「新神功皇后譚」

『太平記』⁽¹⁾四十巻の成立は、南北朝期の応安四～五(一三七一～二)が通説⁽²⁾となっている。巻第三十九の内、「神功皇后攻新羅給事」に、

諏訪・住吉大明神ヲ則副將軍・裨將軍トシテ、自餘ノ大小ノ神祇、樓船三千餘艘ヲ漕雙べ、高麗國へ寄給フ。是ヲ聞テ高麗ノ夷共、兵船一万餘艘ニ取乗テ海上ニ出向フ。戦半ニシテ雌雄未レ決時、皇后先干珠ヲ海中ニ抛給シカバ、潮俄ニ退テ海中陸地ニ成ニケリ。三韓兵共、天我ニ利ヲ與ヘタリト悦テ、皆舟ヨリ下、徒立ニ成テゾ戦ヒケル。此時ニ又皇后満珠ヲ取テ抛給シカバ、潮十方ヨリ漲リ来テ、数万人ノ夷共一人モ不レ残、浪ニ溺テ亡ニケリ。

とあり、続いて、

是ヲ見テ三韓ノ夷ノ王、自罪ヲ謝テ、降参シ給ヒシカバ、神功皇后御弓ノ末弭ニテ、「高麗ノ王ハ我が日本ノ犬也。」ト、石壁ニ書付テ帰ラセ給フ。是ヨリ高麗我朝ニ順テ、多年貢ヲ献ル。

とある。この記事は、『神明鏡』⁽³⁾第十五代神功皇后妃の「又伝」以下にも、引用された。

「干珠満珠譚」や「日本の犬譚」は、既述の「諏訪大明神絵詞」とは若干の違いがあるのみで、基本的に同じである。この「干珠満珠譚」や「日本の犬譚」は、既に永仁元年～正安二年(一二九三～一三〇〇)成立の『八幡愚童訓』⁽⁴⁾甲において集大成された、「新神功皇后譚」の重要な部分を構成している。

この「新神功皇后譚」が『太平記』に取り入れられた時期については、巻第三十九には、後述の貞治六年(一三六七)の高麗の使者についての記事「高麗人来朝事」があることから、貞治六年以降、また、『神明鏡』の「百二代」に、

「今上緒仁ハ後光厳院第一子」とあって、「後円融天皇」を「今上」としていることから、『太平記』を参考にした『神明鏡』の成立が、応安二年～承徳二年(一三八二～一三七一)と考えられ、これが下限で、『太平記』の普及にともなう「新神功皇后譚」のひろがりの一様態を示している。

『太平記』は足利幕府の関与のもとで成立したものである。今川貞世の『難太平記』⁽⁵⁾に、

昔、等統院にて法勝寺の恵珍上人、此記を先三十余巻持参し給ひて、錦小路殿の御目にかけられしを、玄恵法印によませられしに、…

とあって、『太平記』三十余巻を足利直義(錦小路殿)に持参し、玄恵法印が朗読した、という。また、足利直義が「以外のちがひめおほし。追て書入、又切出すべき事等有」と言ったとされ、「後に中絶也。近代重て書続けり」とあるように、挿入、削除、中断を命じている。

『太平記』に対する次の森茂暁氏の指摘⁽⁶⁾は、正鵠を得たものであろう。

『太平記』は軍記物語の形態をとりながら、実は、室町幕府政治の成立・展開の必然性を歴史の中から解き明かし、幕府政治を合理化し、かつ正当化するというすぐれて政治的に性格を合わせもっていることを理解することができるであろう。

『太平記』が巻第三十九の中に、「高麗来朝事」と、蒙古襲来を内容とする「自太元攻日本事」と、「神功皇后攻新羅給事」の三項目を並列して既述したところに、「諏訪縁起絵詞」への足利尊氏の関与と合わせ考えて、その朝鮮観への立脚点をよく表している。

注

(1) 日本古典文学大系『太平記』

(2) 平田俊春「太平記の成立」、『吉野時代の研究』、山一書房、昭和十八年。日本古典文学大系『太平記』解説。新潮日本古典集成『太平記』等の解説による。

(3) 『統群書類従』第二十九輯上

- (4) 日本思想大系『寺社縁起』
- (5) 『群書類従』第二十一輯
- (6) 角川選書『太平記の群像』301 ページ

(4) 八幡大菩薩縁起と掛幅縁起絵

「神功皇后説話」は、鎌倉時代の長期間を通じて、創作の手が加えられ、いくつもの説話が添加され、鎌倉末期に『八幡愚童訓』甲に集大成された。例えば「干珠・満珠」譚のヒントそのものは、『日本書紀』⁽¹⁾仲哀紀二年秋七月乙卯条の、「皇后泊_二豊浦津。是日、皇后得_二如意珠於海中_一」と、神代紀下第十段「海幸山幸譚」の「潮満瓊・潮涸瓊」にあるが、これが龍宮の「娑竭羅竜王」から、「干珠満珠」を借りる内容になり、また、使者として「安曇磯良」が登場し、「細男」の舞を舞う場面を設定するなど、装いを一変させた。

『日本書紀』には、新羅との戦闘譚はなく、「干珠満珠」の戦闘譚は、「新羅は日本の犬」譚とともに、全く鎌倉期に創作されたものである。鎌倉期に創作され集大成されたこれらを、「新神功皇后譚」として特に区別し強調するのは、これこそが日本社会に深く浸透し、知識化され、朝鮮観を決定する具体的内容となったからである。

『八幡愚童訓』甲に集大成された「新神功皇后譚」は、直ちに絵巻『八幡大菩薩御縁起』に取り入れられ、流布した。現在、鎌倉時代の元亨二年（一三二二）の奥書を持つ、東京出光美術館蔵本が、もっとも古いものである。次に、鎌倉末期から南北朝期のものとされる、和歌山県那賀郡・鞆洲八幡宮の「白描縁起」⁽²⁾がある。また、南北朝期のものでは、サンフランシスコ・アジア美術館蔵本⁽³⁾は、康応元年（一三八九）のものである。

室町時代のもものでは、応永九年（一四〇二）の衣奈八幡宮縁起⁽⁴⁾（和歌山県日高郡由良町）がある。大分県宇佐八幡宮蔵本⁽⁵⁾は、応永二十八年（一四二一）から、永享十一年（一四三九）

までの間、五度にわたって書写されている。

兵庫県洲本市・由良湊神社蔵本⁽⁶⁾は、炉口八幡神社（洲本市）が、紀伊国宍粟郡東広庄八幡宮より借用して、永享三年（一四三一）に書写したもの、さらに文安元年（一四四四）に由良社に奉納したものである。

それに、国文学研究資料館蔵本⁽⁷⁾は、文正元年（一四六六）のもので、また最近発見された、京都府綾部市・高津八幡宮蔵本⁽⁸⁾は、文明十七年（一四八五）のものである。

十六世紀では、さきの炉口八幡神社⁽⁹⁾に、大永七年（一五二七）のものがあり、奈良天理図書館蔵本⁽¹⁰⁾は、享禄四年（一五三一）のもの。

大分県杵築市・八幡奈多宮蔵本⁽¹¹⁾は、永禄三年（一五六〇）のもので、奥書から、応永二十八年（一四二一）に、「丹後国一宮本」から写したものを、さらに、永禄三年に再写したものであることがわかる。「丹後国一宮本」はおそらく南北朝期のものであろう。

広島県御調郡・御調八幡宮の霊明転写親本⁽¹²⁾は、永禄九年（一五六六）のもの。大阪府池田市・逸翁美術館蔵本は、年代は分らないが、室町期のものである。

次に、「八幡大菩薩縁起」の絵巻に影響を受けて、北九州の地で作られた一連の「掛幅縁起絵」がある。福岡県久留米市大善寺「玉垂宮縁起絵」⁽¹³⁾は、たてが幅約 2.3 m、横幅約 1.5 m の大きさのもので、破損した古い縁起絵に代えて、建徳元年（一三七〇）この地方の絵師によって、描かれたものである。第一幅には、「新神功皇后譚」の内容を、上から下へ蛇行しながら描いており、下方左には、「新羅は日本の犬」譚、下方中央から斜め左に、「干珠満珠」譚が描かれている。

千栗八幡宮（佐賀県三養郡北茂安町白壁）の「千栗八幡縁起絵」、高良大社（福岡県久留米市御井町）の「高良社縁起」、豊臣秀吉も見た志賀海神社（福岡県志賀島）の「志賀海神社縁起」⁽¹⁴⁾などは、それぞれ室町期のものである。

「掛幅縁起絵」の特徴は、民衆を相手に「絵解き」(解説)され、視覚と聴覚を通じて、大衆化していった点にある。「玉垂社」で、「絵解き」が室町中期に行われていた可能性⁽¹⁵⁾が指摘されており、江戸時代にも引き続き行われていたことは、二種類の江戸末期の「絵解き」台本が残っていることでわかる。大分県の「薦社縁起」は近世の作品で、やはり「絵解き」台本が付随している。

このように、現存する「八幡大菩薩縁起絵」や「掛幅縁起絵」を通じてだけでも、室町時代の「新神功皇后譚」の拡大と定着を理解することができる。

注

- (1) 日本古典文学大系
- (2) 亀田孜『仏教説話絵の研究』、東京美術
- (3) 『新修日本絵巻物全集』別巻2、角川書店
- (4) 『神道大系』神社編四十一、紀伊・淡路国
- (5) 「大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報」、1987年
- (6) 前掲書、『神道大系』神社編四十一
- (7) 宮次男「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起」上、『美術研究』第三三三号
- (8) 『綾部史談』第127号、綾部史談会
- (9) 前掲書、『神道大系』神社編四十一、由良湊神社蔵本・注
- (10) 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第十、角川書店
- (11) 真保亨「八幡大菩薩御縁起(杵筑市奈多宮)」、文化庁編『宇佐・国東半島を中心とする文化財』、昭和四十四年三月。
- (12) 小林芳規『角筆のみちびく世界』、中公新書
- (13) 菊竹淳一「九州の縁起絵」、『仏教芸術』76号、毎日新聞社。西田長男「高良大社の聖母神像」、『日本神道史研究』第一巻所収、講談社
- (14) 図録『社寺参詣曼陀羅』、大阪市立博物館
- (15) 小林健二「大善寺玉垂宮縁起の絵解き」、『絵解き—資料と研究—』所収、三弥井書店

第二章 貞治六年の高麗の使者

(1) 「異国牒状事」

正応五年(一二九二)十月の使者⁽¹⁾以来、な

がらく途絶えていた高麗からの使者が、貞治五年(一三六六)九月二十三日、総勢十七人で「出雲」の地に到着⁽²⁾している。この使者については、『愚管記』貞治六年三月廿日条に、

異国^{或人云、高麗云々}。使者来朝有^二牒状^一云々。此事宜^レ為^二聖断^一。彼牒状武家可^二執進^一歟、為^二公家^一可^レ被^レ召^レ之歟。両様之間、可^レ有^二計沙汰^一之由、去十六日武家執奏云々。

とあり、武家が牒状を朝廷に「執奏」した。使者の目的は、この牒状⁽³⁾に、

有^下賊船数多出^レ自^二貴国地面^一、来^中本省合浦等処。焼^二毀官廨^一、騷^二擾百姓^一、甚至^上殺害^二。

とあって、朝鮮沿岸に出没する「倭寇」に対し、「嚴加^二禁治^一」えることを求めることにあった。

この牒状に対し、朝廷では五月二十三日「殿上定」を行い、「不^レ可^レ有^二返牒^一」⁽⁴⁾の結論を出したが、その理由は、柳原忠光が三條公忠に送った書状⁽⁵⁾に、

牒状依^二無礼^一可^二相廻却^一之由、群義^(マツ)一同候。

とあり、また、『師守記』⁽⁶⁾五月二十三日条の裏頭書に、

文章無礼間、不^レ可^レ有^二返牒^一之由一同。

とあるように、「文章無礼」であるとし、返牒を送らないことを決定した。

「殿上定」に参席した関白二条良基は、これより先五月八日に、大外記中原師茂に「仮名御書」⁽⁷⁾(以下「良基書状」とする)を送っているが、すでにこの時点で、高麗の牒状が「無礼」という前提に立って、「異国牒状無礼之時」の將軍の返牒、太宰府の返牒、少貳の私の返状の例を次の日に報告することを命じている。「良基書状」に、

異国の牒状無礼などにて、返牒の候ハぬとき、將軍の返牒、また太宰府の返牒、又小貳わたくしの返状なとつかハして候例、□□するしされ候て、明白とくへまいらせ

られ候へ。

とある。これに対し中原師茂は次の日、応神天皇廿八年から正応六年までの、「異国牒状到来時返牒或將軍以下遣例事」（以下「師茂返書」とする）を提出している。

「先規」を中原師茂に調査させたのは、単に関白二条良基だけではない。『師守記』によれば、四月廿三日に大理柳原忠光が「異国牒状勘例」を、次の廿四日には前内府三條公忠と大弁萬里小路嗣房が、先例を検討する「杖議」と、最終決定の場の「殿上定」の事例を、それぞれ聞いている。このように、「先規」の検討の上で、「文書無礼」の理由でもって、「不可有返牒」の結論を出した。

ところで、『愚管記』、『後愚昧記』、『師守記』からは、「文章無礼」の具体的内容を知ることができない。これを示唆するものに「異国牒状事」⁽⁶⁾（前田家所蔵文書）がある。この文書は、「前文」、「代々異国よりの礼節の事」、「返牒なき時、宣旨をくだし、太宰府の返牒以下の事」の三つに分けることができる。「前文」前段に、

彼国よりは、皇帝天皇などかけとも、本朝よりは国王とも、渤海の王とも、ふるくはかきしなり、しかあるに、皇帝聖旨とかき、本朝を国主とかく段、太元の朝よりも、高麗にはなをそのとか、ふかかるへし。

とある。これは高麗の牒状に「皇帝聖旨裏、征東行中書省」とあり、「国主前啓裏」とあるのに対応し、それを「その科、深かるべし」と非難したものであった。続いて、

仍、先々殊其沙汰あるが、又今度牒のハシに、あて所なし、年号なし。箱に入らず。

此等乃条々も無礼といふへし。

とあって、直接的には、この二点が「不可有返牒」の理由にされたことが判明する。

しかし、この結論がでる大前提には、神功皇后の「三韓征伐」があり、「高麗朝貢国」観が存在し、これがすべての問題決定なり、価値判

断を規制する基準として存在した。

…次ニ高麗国ハ、神功皇后三韓を退治せられしより、なかへ我朝に帰して西藩となりて、君臣の礼をいたし、朝貢を毎年八十艘をおくりし事、上古ハたえす。

とし、

しかるに、中古以来太元ニしたかえられて、彼藩臣となる。しかありとも、いかてか旧盟をわすれん。仍、代々高麗の礼は格別のことなり。無礼の事。ことに其沙汰あり。

とするように、神功皇后の「三韓退治」以降、「上古」は日本の「西藩」として、「君臣の礼」を守り「朝貢」が絶えなかった。「中古」は、蒙古に従属していても、「旧盟」を忘れず来朝する。だが「君臣の礼」に違反するときは、その「無礼」に対し「格別」に処置を講ずるというものであった。

『後愚昧記』六月二十六日条に、

後聞、高麗牒使今日下向云々。於ニ公家一者、不レ可有ニ返牒一之由、雖ニ落居一自ニ武家一遣ニ返牒。

とあり、「行忠卿清書云々」とあって、六月二十六日室町幕府からの返牒を受取り、高麗の使者は帰国の途についている。

「前田家所蔵文書」に、「今度一向武家の御沙汰たるへきあいた、子細をしるさす」とあることから見て、この文書は、朝廷側が返牒を送らないことを決めた五月二十三日以降、六月二十六日までに書かれたものと推測できる。また、筆者については、関白二条良基⁽⁶⁾の説があるが、既述の「良基書状」に、「將軍の返牒、また太宰府の返牒、又小貳わたくしの返状」の表記があり、「前田家所蔵文書」もこのそれぞれに言及されていること、また、「師茂返書」が応神天皇から、正応五年までの牒状に言及しており、「前田家所蔵文書」また一項を設けていること等によって、「二条良基」説に首肯できる。少なくとも、大外記中原師茂を含めた二条良基周

辺の公家によって、書かれたものであろう。

以上、貞治六年の高麗の使者をめぐる、当時の公家側の朝鮮観の根底に、神功皇后が存在し、これが規範的思考として存在したことを明らかにした。

注

- (1)『高麗史』卷三十、忠烈王十八年九月壬午条、および十月庚寅条、国書刊行会。『北条九代記』下、「統群書類従」第二十九輯、統群書類従完成会
- (2)日本古典文学大系『太平記』、卷三十九、「高麗人来朝事」
- (3)「報恩院文書」、前掲書『太平記』、卷三十九の補注三二
- (4)『愚管記』五月二十三日条
- (5)『後愚昧記』一、五月二十三日条
- (6)史料纂集『師守記』九、五月廿三日条、統群書類従完成会
- (7)『師守記』五月八日条
- (8)和田英松「異国牒状事」、『弘安文禄 征戦偉績』下編、富山房、大正三十八年
- (9)注8参照

(2)春屋妙葩の高麗観

出雲に到着した高麗の使者十七名については、『太平記』に、次のようにある。

洛中へハ不レ被レ入シテ、天龍寺ニゾ被レ置ケル。

また、『愚管記』三月廿日条に、「去十六日武家執奏云々。彼使者經ニ廻天龍寺邊云々」とあり、『善隣国宝記』⁽¹⁾上、後光厳院貞治六年丁未条に、「四月十八日、於ニ天龍寺雲居菴ニ延ニ接高麗使」とあることから、おそらく、三月中旬京都に到着し、天龍寺雲居菴に宿泊したものであろう。

ところで、『善隣国宝記』同条によれば、二月二十七日、新たに高麗からの使者金一がやって来ている。この一行は、『師守記』四月六日条頭書に、「今日聞、高麗人三十余人、重付ニ嵯峨云々」とあるように、先の使者と嵯峨天龍寺で合流した。

さて、『師守記』四月十八条に、

今日鎌倉前大納言、被レ渡ニ嵯峨。……是、異国牒使舞為ニ見物云々。日本伶人同舞、著レ鎧舞之也云々。

とあるように、二代將軍足利義詮は、「異国牒使舞」を見物するため、嵯峨に赴いている。義詮は、高麗使が帰国する前々日の六月二十四日にも嵯峨⁽²⁾に行っており、帰国に際しては「種々重宝」をつけさせる一方、「天龍寺僧」⁽³⁾を「相伴渡海」させている。これに先立つ、五月十九日には、奈良の大仏殿⁽⁴⁾を見物させている。

このように、朝廷側が高麗の使者に対し、外交的接触を持たず、関知しない態度を取ったのに反し、幕府側は使節を受け入れ、五山僧に接待の任務をおわせ、返牒の処置を取り、五山僧を伴い帰国させた。これらのことから、貞治六年の使者に対する鎌倉幕府の外交姿勢に対し、次のような高橋公明氏の評価がある。高橋氏は、「室町幕府の外交姿勢」⁽⁵⁾において、「伝統的外交観」を、

律令的国家成立後の日本は、朝鮮半島の王朝に対しては優位な立場、中国の王朝に対しては対等あるいはそれに近い立場をとることが、外交的姿勢であった。このような姿勢をとることを正当とする外交観を本稿では伝統的外交観と名づける。

と定義した上で、

…その時の幕府の外交姿勢は、高麗を日本の朝貢国と看做す伝統的外交観に制約されるものでなかったことが推定される。

と評価した。これを検討してみる。

天龍寺滞在中の高麗の使者に対する接待は、天龍寺住持・春屋妙葩（知覚普明国師）がであった。『知覚普明国師行業実録』⁽⁶⁾は、

師憐ニ其遠来、待遇甚厚。千戸金龍等二十五員。仰ニ師仁慈、皆受ニ衣盃、執ニ弟子礼。

とするエピソードを伝えている。

高麗の使者への返牒は、春屋妙葩が「僧録」

の名義で送った「私の返状」⁽⁷⁾と考えられており、五山僧が外交の実務を掌った初めての例として著名である。この逸話の直接的目的は、高麗の使者が「弟子礼」をとったことをもって、外交の直接担当者であった春屋妙葩の「仁慈」を強調するためにある。

したがってこの逸話が、どこまで事実を伝えているものか不明であるが、『本朝高僧伝』⁽⁸⁾巻第三十五の「妙葩伝」にも、

響_二葩道望、皆受_二衣盃、執_二弟子礼。
とあることから、よく知られた逸話なのであろう。

ところで、春屋妙葩は、高麗の使者がまだ天龍寺に滞在中、「登真院大禪定尼大祥忌辰請」⁽⁹⁾に、

海内便見_二干戈息、天下応_レ無_二姦凶雄。
仁化德賓_二高麗国。
と「仁北德」が高麗国をしたがえる、といっている。

「海内便見干戈息、天下応無姦凶雄」とあり、この文は、「一天静謐」「四海無為」が、神功皇后によってもたらされたと認識した、足利尊氏と同じ文脈で理解できる。また、春屋妙葩の「仁慈」・「仁化德」観が、「高麗従属国」観をベースに導き出された概念であることが判明する。ここではこの点のみを指摘して、次に、別の角度から、これを検討してみよう。

注

(1)『統群書類従』第三十輯上

(2)『師守記』六月廿四日条

(3)『愚管記』応安元年閏六月二日条

(4)『師守記』五月十九日条

(5)歴史学研究会編集『歴史学研究』No.546、青木書店

(6)「宝幢開山知覚普明国師行業実録」、『統群書類従』第九輯下

(7)中村栄孝『日鮮関係史の研究』上、『太平記』に見える高麗人の来朝』吉川弘文館

(8)『大日本仏教全書』名著普及会

(9)「知覚普明国師語録」、『大正新脩大藏經』第八十卷、大正新脩大藏經刊行会

(3)「山門訴状案」と「三韓之異類」

高麗の使者がまだ滞在中の六月十七日、南禅寺と三井寺の間で騒動が持ち上がった。南禅寺は楼門造営のため関を設け、通行者から関銭を徴収した。通りかかった三井寺の童僧は、関銭を払わず、問答の末、殺害された。

翌日、三井寺の衆徒は「関所悉破却」し、南禅寺は幕府に「嗽訴」した。高麗の使者が帰国する二十六日、幕府は三井寺側の三つの関を破壊した。一方、三井寺は延暦寺と興福寺のバックアップのもと、北朝に「嗽訴」⁽¹⁾した。

九月、南禅寺の僧定山祖禪は『続正法論』⁽²⁾を著し、密宗・法相・天台・華嚴・三論・津宗・成実・俱舎の八宗を「如來の伝之正法」に非ずとし、「吾宗之一隅」にも及ばないとした。そして、延暦寺を、

唯為_二七社之彌候、以_二于人-而非_レ人者也。

と誹謗し、三井寺（園城寺）に対しては、

復園城寺之惡党等者、独為_二三井之蝦蟇、於_二于畜-尤劣者也。

と中傷した。

三井寺側は、応安元年（一三六八）七月廿三日、南禅寺以下の禅院の撤却を北朝に「嗽訴」した。延暦寺は、閏六月の「山門訴状案」⁽³⁾の序文に、

於_レ是、頃年禅法興行、黒衣流布、盈_レ城溢_レ柳。…是則、弘安以後新渡之僧、来朝之客、皆是宋土之異類、蒙古之伴党也。

とするように、「禅宗」を抗議する事例として、「来朝之客」を「禅僧」と同等のものとして取り上げ、共に「宋土之異類、蒙古之伴党」であるとした。この「来朝之客」が、前年の高麗の使者を、念頭においたものであることは明らかである。

『後愚昧記』三月廿四日条に、

自_二去月之此、蒙古并高麗使、持_二牒状-来朝之由、有_二其間。

とあり、五月九日条に、

又語曰、今度異国人ハ皆高麗人也。非ニ蒙古人ニ云々。

とあるように、貞治六年の高麗の使者は、「蒙古人」と間違えられた。

応永期（一三九四～一四二七）末期か、それから間もない成立と思われる『鳩嶺雜事記』⁽⁴⁾には、

（貞治六年）同月、高麗人以ニ牒狀ニ來朝。太元牒狀同相具來了。

とあって、この時期、一般的に蒙古の牒状を持参したものと理解されている。それは、高麗の使者が文永四年（一二六七）、蒙古の牒状伝達のため来日、また、文永十一年および弘安四年のいわゆる「蒙古襲来」に参戦したことに起因する。このことから、「ムクリ・コクリ」の語が生まれ、高麗といえば、蒙古をストレートに連想させるものとしてあった。

注目すべきは、蒙古襲来時に神功皇后が想起された点にある。『八幡愚童訓』⁽⁵⁾甲によれば、石清水八幡宮は、弘安の役するとき、「女御子ヲ男ニ成シテ甲冑着セ兵杖ヲ持セテ、異国ノ合戦ニ打勝タル悦申ノ儀式」を行っている。これは、神功皇后が櫛日浦で男装したという、『日本書紀』の記事を模したものであった。また、石清水八幡宮では、蒙古襲来の際の勝利が、

神功皇后ハ海上ヲ上げ、文永ニ猛火ヲ出シ、弘安ニハ大風ヲ吹ス。水火風ノ三災、却末ナラネド出来テ、任ニ神慮ニ自在也。

と、神功皇后の「神慮」によるとすると認識を持っていた。

蒙古襲来と神功皇后は、表裏の関係として意識された存在であった。これは蒙古襲来以降の伝統的思考方法であって、貞治六年の事例または決して例外ではない。既述の「山門訴状案」は、「神明仏陀惡禪法事」の項を最初に設定し、夫扶桑朝者、神明開レ統、仏陀垂レ跡。天神地祇護ニ吾国。

と、日本を「神明」が端緒を開き、「仏陀」が垂迹した国であると強調した上で、

…三宝常住之日、遙出ニ扶桑朝、八宗弘通之風、遠扇ニ葦原中。籍レ斯、異域更不レ成ニ窺竄、三韓遂帰ニ降伏。

とするように、神功皇后の「三韓降伏」がなによりも強調された。このことは、とりもなおさず、貞治六年の使者を、「八宗弘通之風」を受け、日本に帰順の意を示したものとして理解されていたことを示す。

すでに拙稿「異類、異形とその思想」⁽⁶⁾において、九世紀（貞観・元慶期）の日本の朝廷は、新羅を「他国異類」と規定したが、新羅の国を「狢窟」とするように、「異類」の語に「新羅禽獸観」が内包されていること、また貞観・元慶期は、「新羅禽獸観」の成立した時期であったこと、「異類」の語には、十一世紀以降、「鬼」・「鬼神」の概念が付与され、鎌倉末期には、新羅を「鬼」とする頭八つの「塵輪」が創作されたこと、などを明らかにした。

高野山金剛三昧院所蔵本⁽⁷⁾『八幡愚童記』の第一冊奥書に、

凡仏者、入ニ衆生之心地、設ニ齋度之方便。神者、秘ニ垂跡之和光、同ニ結縁之密類一者也。此書也、吾神令レ降ニ伏三韓之異類、粵、令レ防ニ禦四海之凶賊ニ給。尤可レ崇者、此神也。尤可レ敬者、当社也。

とあるように、神が「三韓之異類」を「降伏」せしめ、「四海の凶賊」を防がしめたといっている。

「異類」の語に象徴される排他的感情は、日本神国観に立脚し、神功皇后の「三韓征伐」と連動して、「新羅禽獸観」の上に形成された概念である。またこの概念は、歴史的継続性を経て形成され存在する概念であり、固定的概念であった。

この写本は奥書に、「永和元年（一三七五）七月廿三日、終ニ写功ニ畢」とあるが、このよ

うな時代思潮のとき、高麗の使者がやって来ている。『愚管記』永和二年五月三日条に、

牒状之趣、海賊可_レ被_二禁制_一之旨也。大概同_二貞治之牒状_一。但今度高麗一国牒状也。

とある。第三代將軍足利義満の時代であった。

注

- (1)『師守記』六月十八日条、廿四日条、廿六日条
- (2)『八坂神社記録』上、八坂神社社務所発行、昭和十七年。臨川書店より、増補「統史料大成」に四分冊で復刊
- (3)『山門噉訴記』、『後愚昧記』応安元年七月
- (4)「石清水文書之四」、大日本古文書・家わけ第四、東京大学出版会
石清水八幡宮本は、康暦元年（一三九七）の記事で終っているが、「從_二貞治_一至_二応永年中_一」とあることから、成立は応永末期か、それから間もないと考えられる。
- (5)日本思想大系『寺社縁起』、191・193 ページ、岩波書店
- (6)拙稿「異類・異形とその思想」、『鷹陵史学』第16号、仏教大学歴史研究所
- (7)久保田収「八幡愚童記について一金剛三昧院本を中心として」、『密教文化』四八・四九・五〇合併号

第三章 朝鮮と室町幕府との 外交成立の評価

(1)「日本国王源道義」の評価

一三九二年七月、高麗が滅亡し、李氏朝鮮が成立した。日本では十月、南北朝が合一した。

『善隣国宝記』上、明徳三年（一三九二）十二月廿七日付「答朝鮮書」に、「仲冬初、貴国僧覺鑑来」とあり、「論、以_二海寇未_レ息兩國生_レ釁。此事誠如_二来言_一」から、この年朝鮮⁽¹⁾からの使者があり、この使者の目的が、倭寇の禁遏要請にあったことが判明する。また、

今將_下申命_二鎮西守臣_一、禁_二遏賊船_一、放_中還俘虜_上。當_下備_二兩國之鄰好_一、永結_中二天歡心_上、美所_レ願也。

とある。この「答朝鮮書」は、相国寺の僧絶海

中津の撰によるが、「兩國之鄰好」とは、倭寇の取り締まりと、俘虜の帰還の二点に、深く関係して理解されたものであった。貞治六年の高麗の牒状にも、

若使_二發_レ兵勦捕_一、恐_レ非_二交隣之道_一。

とあり、「交隣之道」が、武力を前提にしたものでないことを強調している。

周防・長門・石見の守護大内義弘は、応永四年（一三九七）十一月十四日、僧永範・永廓を朝鮮に派遣⁽²⁾している。朝鮮側は十二月、永範・永廓の帰国に同行させて、「回札使」として前秘書監朴惇之を日本に派遣⁽³⁾した。朝鮮側は「復義弘書」の中で、

大相国禁賊之事、誠交隣繼好之美意也。

と、足利義満（大相国）を最大限に持ち上げた。

謀_二議於大相国_一、禁_二制兇徒_一、以篤_二隣好_一。

…兩國和好之美、垂_二於永世_一矣。

とあり、朝鮮側の交隣・隣好の語に表現される概念は、ただ一点、倭寇の禁遏に集中された。

幕府側は、僧絶海中津撰の「応永五年、論_二朝鮮_一書」（『善隣国宝記』中）によれば、

次當_下遣_二偏師_一、盡殲_二海島殘寇_一、以通_二往来舟船_一、而結_中兩國歡心_上也。

と、継続して倭寇取締を強調した上で、「大蔵経」「銅鍾」「藥物」を要求した。これが、日本側にとっての「兩國之鄰好」であり、「二天歡心」の内容であった。

応永六年（一三九九）五月十六日、朴惇之は帰国した。『定宗実録』巻一、元年五月乙酉条に、

通信官朴惇之同_レ自_二日本_一、日本国大將軍遣_レ使来、献_二方物_一。發_二遣被虜男女五百餘人_一。…大相国母献_二刻木地藏堂主千仏圍繞一座、極精巧、絹十四・胡椒十封_一。

とあるごとく、「日本国大將軍」義満は、「使者」を派遣し、「被虜男女五百餘人」を送還した。

また、義満の母紀良子も贈物を送っている。

ここに、朝鮮と室町幕府間の外交関係が成立

した、義満は、応永八年（一四〇一）九月十六日、兵庫の港で「高麗船著岸」を「御覧」⁽⁴⁾になっており、応永十年（一四〇三）十月廿九日、「高麗客」と「御対面」⁽⁵⁾している。しかし、この外交関係の成立は、既に指摘⁽⁶⁾されているように、「幕府が直接朝鮮国王に文書を送ること」をしない、「伝統的外交慣習を尊重」したものであった。

さて、『太宗実録』巻八、四年七月己巳条に、
日本遣_二使来聘_一。且献_二土物_一。日本国王源道義也。

とある。太宗四年は、応永十一年（一四〇四）に該当し、「日本国王源道義」は足利義満のことであるが、これについて、荒野泰典氏⁽⁷⁾は、義満は朝鮮に対しても「日本国王」としてはじめて正式使節（「日本国王使」）を派遣し、国交を開いた。……こうして足利将軍と朝鮮国王の間に、明の冊封を媒介として対等の外交体制（交隣体制）が成立した。とし、姜在彦氏⁽⁸⁾も、

かれは一四〇四年に、日本国王として使僧周棠を朝鮮に派遣した。すなわち朝鮮国王と日本国王との対等な伉礼による交隣関係のはじまりである。

とする。孫承詒氏⁽⁹⁾もまた、

一四〇四年には、朝鮮に対し、「日本国王使」とする正式の使節を送り、両国間には、明の冊封国家としての対等の外交（交隣）関係が結ばれた。（訳責筆者）

とする。

これらの主張の共通点は、足利義満が「日本国王源道義」名を使用したとすること。次に、明の冊封体制のもとで、対等の外交関係が成立した、とする二点にある。

ところで「日本国王源道義」の名は『太宗実録』に記載されているのみで、日本側の文献では確認できない。応永二十六年（一四一九）六月、いわゆる「応永の外寇」後としては初めて、

義持の使者が朝鮮に渡った。『世宗実録』巻第六、世宗元年十二月丁亥条に、

日本国源義持使臣亮倪、詣_レ闕進_二書契_一。

……義持父道義、帝嘗封為_レ王、義持不_レ用_レ命、自称_二征夷大將軍_一。而国人則謂_二之御所_一。故、其書只日本国源義持、無_二王字_一。

とあって、これから、義満が「王字」を使用し、同時に、義持は「王字」を使用しなかったことが確認できる。『善隣国記』によれば、応永二十九年（一四二二）の「遣朝鮮書」に、「日本国源義持」とあり、義持は引き続き「王字」を使用しなかった。

義満が朝鮮に「日本国王源道義」名で使者を送ったことによって、朝鮮と日本間に、明の冊封を媒介とした「対等な伉礼」が成立したとする観点にたつならば、応永十五年（一四〇八）の義満の死後、義持以降、「日本国王」を称することはなかったのであるから、それを「対等な伉礼」の関係が破綻したとみるのが、論理的な帰結だ。しかし、これについては無視するのが、室町時代「善隣友好」論者の顕著な特徴である。

李氏朝鮮側は、「日本国王源□□」の表記を継続して使用したが、それは、朝鮮側が相互を明の冊封秩序のもとでの「藩屏の臣下」と、勝手に考えたところから来る、独断的な処遇に過ぎない。それは日本側の預かり知らないものであった。

義持が、明の冊封秩序下の「伉礼」の相手として朝鮮を認識していなかったことは、応永二十九年の「遣朝鮮書」に、明の年号「永楽」を使わず、日本の「応永」の年号を使用したところにも、よく表われている。朝鮮側は、応永二十七年（一四二〇）、義持の使者に対する「回礼使」を送っているが、『世宗実録』巻第十、世宗二年十月癸卯条によれば、

国書以_二永楽_一記_レ年。故、御所惡_レ之、不_レ接_二見於京都_一也。何不_レ用_二我_レ應永年号_一乎。

とあって、義持は、朝鮮側が明の年号「永楽」を使用し、「応永」の年号を使用しなかったことを咎めている。これは、対等どころか、朝鮮「従属国」観を端的に表わしたものである。

「王字」の不使用の姿勢は、義持の時代の一時的現象ではなく、一貫して変化しなかった。義教の時代、永享十二年（一四四〇）の「答朝鮮書」に、「日本国源義教」とあった。また、義政の時代、康正二年（一四五六）の「遣朝鮮書」にも、「日本国源義政」⁽¹⁰⁾とあって、室町幕府は「日本国源□□」の形式を通した。これは、「明」に対しては変わることなく「日本国王源□□」の形式を維持したのとは、著しい対象をなしたのであった。

田中健夫氏は既に⁽¹¹⁾、「日本国源□□」の形式と関連して、

日本が朝鮮半島に対して優位を保持しようとする伝統的な観念は、新しい武家政権の時代を迎えても払拭されることはなかった。と指摘しているが、これはまったく的を得た指摘である。

注

(1) 田中健夫氏は、『中世対外関係史』（東京大学出版会）第三章、「室町幕府の朝鮮通交」で、「仲冬初」が十一月に該当することから、李氏朝鮮の使者とする。

(2) 『太祖実録』巻第十二、丁丑六年、十一月壬戌条。『影印縮刷版 朝鮮王朝実録』、国史編纂委員会

(3) 『太祖実録』巻第十二、丁丑六年、十二月癸卯条

(4) 『統史愚抄』卅一、応永八年九月十六日条、国史大系

(5) 『吉田家日記』、「兼敦朝臣記」、天理図書館蔵

(6) 注1参照

(7) 「大君外交体制の確立」、『近世日本と東アジア』、東京大学出版会

(8) 「室町・江戸時代の善隣関係」、『季刊三千里』37号、三千里社。「歴史の中の朝鮮王朝」、『季刊 青丘』14、青丘文化社

(9) 『近世韓日関係史』230 ページ、江原大学校出版部

(10) 『善隣国宝記』

(11) 注1参照

(2)「朝鮮朝貢国」観と義満と世阿弥

義満は朝鮮に対して「日本国王源道義」を称した。既述のように、義満の母、紀良子も朝鮮に贈物を送っている。たしかに義満の時期は、朝鮮と日本の関係において、従来とは違った変化の兆候はあった。しかし、憶測をたくましくして、義満を過大評価するのも問題があろう。

『申楽談儀』⁽¹⁾によれば、観阿弥と世阿弥親子が、足利義満の知遇を得ることになったのは、応安七年（一三七四）、新熊野社で催した申楽以降であった。時に、義満十七歳、世阿弥十二歳であった、以来、義満の絶大なる庇護のもと、能楽は観阿弥と世阿弥親子によって、大成された。

世阿弥⁽²⁾の作とされる「呉服」⁽³⁾がある。廷臣が西宮社参詣にでかける途中、「呉服」の里で、呉織（前ジテ）と漢織（ツレ）の二人に出会う。廷臣の問いかけに、呉織は応神天皇の時代に渡来し、今の世に再び姿を現わした由来を語る。

シテ「然るに神功皇后、三韓を従へ給ひしより

地謡「和国異朝の道広く、人の国まで靡く世の、わが日の本は長閑なる、御代の光はあまねくて、国富み民豊かなり

シテ「東南雲収まりて、西北に風静かなり地謡「応神天皇の御宇かとよ…

曲の最後は、「とりどりの御調物、供ふる御代こそめでたけれ」と、「調物」が次から次へと届けられる応神の時代を賛美し終る。

世阿弥の『弓八幡』⁽⁴⁾にも

シテ「然るに神功皇后、三韓を鎮め給ひしより

地謡「同じく応神天皇の御聖運、御在位も久し。国富み民も豊かに治まる天が下、今に絶えせぬ御貢とかや

とあるが、「呉織」と共に、「朝貢」の典型的人物として考えられたのが、「王仁」であった。『太平記』巻三十九、「神功皇后攻新羅給事」には、

…是ヨリ高麗我朝ニ順テ、多年其貢ヲ献ル。
古ハ呉服部ト云綾織、王仁ト云才人、我朝
ニ来リケルモ、此貢ニ備リ、……

とあるし、『神明鏡』神功皇后紀にも、「サテコ
ソ、三韓ヨリノ朝貢八年々ニ備ヘケリ」とした
上で、

又王仁ト云ル才人、呉服ト云綾織モ、此時
渡ケル也。

とした、さらに、世阿弥は『難波』⁽⁵⁾で、「王仁」
を、「君を崇め、国を守る」形象として設定した。

このように、「異朝の道」が、「神功皇后、三
韓を従へ給ひしより」開かれ、「御貢」によっ
て、応神天皇の「御代」が、「光はあまねくて、
国富み民豊か」なる時代だとする思想を、世阿
弥は謡曲に形象化した。

同じ世阿弥の「弓八幡」の、

然れば神功皇后も、異国退治の御為に、九
州四王寺の峯に於て、七箇日の御神拜

とする内容や、「箱崎」⁽⁶⁾の

抑此箱崎の松と申は、忝も神功皇后異国た
いちの御時、此国にくだり、戒定恵の三学
の妙文を、金の箱に入て此松の下に埋給ふ
により、箱崎とは申也

にしても、それは「新神功皇后譚」の流布と広
がりを示している。この中で、「呉織」や「王
仁」が朝貢の象徴として認識され、創作されて
いった。

江戸時代に入って、享保二年（一七一七）の
著、『秦山集』⁽⁷⁾で、谷重遠が、

応神天皇時、三韓来貢。国勢強盛、人悉欣
誇。

とし、天保三～五年（一八三二～四）頃の刊行
とされる『恵登理之考』⁽⁸⁾で、青柳種信が、

……皇后の新羅を征し給ひしより、海外の
路開けて異国の人、夥しく皇国に帰化せり。
夫より応神・仁徳の御世に至りて、秦・漢
の裔孫、各其ノ国の人民を率ひて来朝せり。
としたが、この主張の源は、まさに南北朝から

室町期によみがえるのである。

さて、『申学談儀』の内容から、足利義満は
単なる能楽の愛好者でなく、能楽に精通してい
ることがわかる。世阿弥が「新神功皇后譚」を
謡曲に形象化・作品化したのが、それは「新神功
皇后譚」の広がりやを反映したものであり、また
義満にとっては、その作品化によって、より反
復的にかつ思想的に投影されることになった。
義満は「神功皇后の朝鮮観」から、決して
自由でなかった。

注

- (1)「申学談儀」、日本思想大系『世阿弥禅竹』
- (2)伊藤正義校注『謡曲集』中、新潮日本古典集成
- (3)西野春雄「中作能の作者と作品」、岩波講座『能・
狂言』Ⅲ。「自家伝抄」、『能一研究と評論一』第八
号、月曜会
- (4)野上豊一郎『註解 謡曲全集』第一巻、中央公論社
- (5)新潮日本古典集成『謡曲集』下
- (6)『謡曲全集』下巻、国民文庫刊行会、明治四十三年
- (7)『秦山集』禮、十五、明治四十三年
- (8)『盛田嘉徳 部落問題選集』、大阪・部落解放研
究所

(3)嘉吉三年の朝鮮通信使をめぐる問題

「朝鮮通信使」の名称で日本に使者が来たの
は、義教の時代の永享元年（一四二九）、同十
一年（一四三九）の二回。それに、次の義勝の
時代の嘉吉三年（一四四三）の計三回で、朝鮮
ではすべて四代世宗の時代にあたる。

嘉吉三年の場合は、「奉弔普広院喪之由聘使」
として、つまり二年前の「嘉吉の乱」で殺され
た、將軍義教の弔問のための使者であった。

『康富記』⁽¹⁾嘉吉三年五月六日条によれば、
大外記清原業忠は次のようにいっている。

於ニ高麗人一者、既神功皇后御退治以来、
来服之三韓之随一也。高麗相通者可レ叶ニ
神慮一也。…所詮上古往昔ハ来朝之貢賦也。
將軍義教の弔問のための使いを、「来服」の範
疇でとらえ、高麗との交流を「神慮」に叶うも
のとする立場であった。

これは『建内記』⁽²⁾嘉吉三年六月廿三日条に、高麗国朝貢使来朝。とあるごとく「朝貢使」とする立場と全く軌を一つにするものであった。

「朝貢」の観念で「通信使」ととらえるのは、先の永亨十一年の「通信使」についても同じであった。『蔭涼軒日録』⁽³⁾十二月二十六日条に、高麗通信使参_二殿中_一、乃於_二南面欄中_一三拜而奉_レ書、所_レ貢方物件々、納_二之正実坊公倉_一。とあり、「貢ぎ物」と理解されていた。

一方、武家側の対応は次の通りであった。幼少の足利義勝の代理、管領畠山持国らの武家側の立場は、「諸国役出銭不_レ可_レ叶」とし、

高麗人不_レ可_レ被_レ入_二立京都_一、可_レ被_二追返_一也。

と、追い返そうとする立場であった。しかしこれは、清原業忠の「只不_レ可_レ入之由、今更被_レ仰_レ者、可_レ為_二後年煩_一歟」の意見で、取り止めになった。

ところで、通信使は相国寺で管領畠山持国と対面した。しかし、『世宗実録』巻第一百二、世宗二十五年十月甲午条に、

到_二相国寺_一。……大和守（飯尾貞連）云、国王年少、管領実権。王坐當_二南向_一。使臣在_レ東。臣云、客東主西禮也。

とあるように、「面位」について、幕府側の主張「王坐當南向」、つまり「管領北側、使者東側」と、使者側の主張「客東主西禮也」、つまり「管領西側、使者東側」をめぐる対立し、大和守の「然則、管領在東、使臣在西可也」で落着している。

『成宗実録』巻第一百一、成宗十年二月丙申条によれば、管領側は「爾国、自_レ古来朝」を主張した。

管提曰、爾国自_レ古来朝、爾何独不_レ然。即、取_二一編書_一示_レ之。書曰、高麗来朝、新羅来朝。乃云、汝不_レ肯_レ坐_二南_一。當序_二

於西。

と、幕府側が取りだした「一編書」には、「高麗来朝、新羅来朝」が書かれていた。このように、武家側の姿勢は、上古のみならず一貫して「来朝之貢賦」視するものであった。

このとき、李氏朝鮮側は「吾與爾、均敵」、つまりお互いを「伉礼の国」と主張しているが、この対等の主張は、李氏朝鮮側の一方的な「思い込み」に過ぎないことを露呈していた。

以上については、既に、「十五世紀の幕府内部に朝鮮を一段低い国とみる観点の存在したことが明らかになった」とする村井章介氏⁽⁴⁾の指摘がある。

この「十五世紀の幕府内部」の「朝鮮を一段低い国とみる観点」が、足利尊氏以来一貫して受け入れて来たあのお馴染みの「干珠満珠譚」や「新羅は日本の犬譚」を核とする、「新神功皇后譚」にずばり依拠したものであることは、次節のように、「朝鮮通信使」接待側の足利義教の、「八幡縁起絵」の「奉納」の事例をもってして、明らかである。

注

(1)『増補 史料大成』、臨川書店

(2)『大日本古記録』

(3)『増補 史料大成』続編、臨川書店

(4)「国際交流の展開と対外観」、『補論1 中世人の朝鮮観をめぐる論争』、『アジアの中の中世日本』所収、校倉書房

(4)足利義教奉納「八幡縁起絵」

六代將軍足利義教は、永亨五年（一四三三）四月二十一日、石清水八幡宮⁽¹⁾・誉田八幡宮⁽²⁾・宇佐八幡宮⁽³⁾のそれぞれに、「八幡縁起絵」の「新図」を奉納した。

嘉永六年（一八五三）の成立の『後鑑』⁽⁴⁾に、神功皇后絵詞及誉田宗廟絵詞成_レ功、被_レ納_二誉田八幡宮_一。仍_二大内被_レ誅事_一公武参賀。此曰、於_二糾河原_一有_二勸進能_一。將軍家及公武見物。

とあるように、義教は「神功皇后縁起」奉納の日、「勸進能」を催して祝った。

誉田八幡宮本は「紙本着色」であるが、「石清水八幡宮本」（昭和二十二年焼失）は絹本で、「絹本」は他に『春日権現験記絵』『一遍上人絵伝』『誉田宗廟縁起』と少例であることから、「勸進能」を含め、足利幕府のこの絵巻に対する関心の大きさを示している。

義教奉納縁起絵と、第一章で言及した『八幡大菩薩縁起』との最大の相違点は、仲哀天皇二年、「新羅国より、数万の軍兵攻来り、日本を討とらんとす」と、「新羅日本攻撃」説を造作し、「色ハあかく、頭ハハ」もあり、形は「鬼神」である「塵輪」なる「異形」を創作した点にある。

「塵輪」が長門国豊浦郡を侵略する、という設定で、仲哀天皇に首を切られ、「頭と身」が二つになって死ぬ。ところがこのとき、仲哀天皇も「流れ矢」に当たって死ぬ。神功皇后は、仲哀天皇の「異国を討たひらけ給へし」の遺言に従って、「新羅征伐」に出発する、というものである。義教奉納の「八幡縁起絵」は、『八幡愚童訓』甲を充実に絵画化し、「塵輪」を登場させた。

鎌倉末期には、「塵輪」を作り出しただけでなく、『八幡愚童訓』甲に、

新羅、百済、高麗国ノ王臣ハ、貪欲心ニ飽タル事ナク、驕慢身ニ不レ絶余リ、日本我朝ヲ討取ントテ寄来事、数ケ度ナリ。

とあり、また、

倭、異国襲来ヲ算レバ、人王第九開化天皇四十八年ニ二十万三千人、仲哀天皇ノ御宇ニ二十万三千人、神功皇后ノ御代ニ三万八千五百人、応神天皇ノ御宇ニ二十五万人、……已上十一箇度競来ト云ヘドモ、皆被ニ追帰、多ハ滅亡セリ。

とあるように、日本への侵略「複数回」説が主張されたのである。

永和四年（一三七八）に書写されたと思われる『伊豫三島縁起』⁽⁶⁾は、「代々異国敵誅伐目録」とあるが、これに、

十四代仲哀天王⁽⁷⁷⁾位。八幡御父也。此御宇異国塵輪云物、長門国豊浦郡渡。

とある。この縁起は、『八幡愚童訓』の影響を受けて成立したものである。

成立が、永正十四年（一五一七）の『清水寺縁起絵巻』⁽⁶⁾上巻に、

抑むかし、仲哀天皇の御宇にや。西戎我朝を奪はむとて、十萬餘艘の兵船を、雲の浪煙の浪に漕うかへ、大將は八面の鬼形とかや、然時、帝御みつから帥をひきいて赴給しに、……又種々の御策を廻され、遂に三韓をたいらけましけりとそ。

とあるが、これも「八幡縁起絵」に影響を受けたものである。この「新羅日本攻撃」説のフィクションは、鎌倉末期以降流布し、朝鮮観形成の構成要素として、大きな影響を与えた。

江戸時代、対馬藩に仕え、朝鮮との外交に従事した雨森芳州の、享保五年（一七二〇）の著『朝鮮風俗考』⁽⁷⁾に、

忽鉢、朝鮮人は其性しぶとく、謀ヲ好ミ候。……王代の時、新羅、毎度日本を攻候而、我国の難儀に成り候段、古、日本の記録に有レ之候ハ、偏ニ其性しぶとく、謀を好ミ候故ニも候哉。

とある「古、日本の記録」とは、以上のことを指すのである。この記事によって、雨森芳州が「新羅日本攻撃」説を信じ、「我国の難儀」と認識していたこと、そして、「新羅日本攻撃」説をもって、「朝鮮人は其性しぶとく、謀ヲ好ミ候」説立証の根拠にしたことがわかる。

この「八幡縁起絵」の系統に、東大寺「手向山八幡宮宝殿」⁽⁸⁾に、天文四年（一五三五）に奉納されたものがある。また、大分市杵原八幡宮の『由原八幡宮御縁起』の制作年代は、大永年間（一五二一～七）に比定⁽⁹⁾されている。

江戸時代に入ると、大橋入道式部卿法印龍慶が寛永十八年（一六四一）に、「神功皇后縁起絵」を模写した模写本（菅田八幡宮蔵）があり、新井白石の著『退私録』⁽¹⁰⁾巻之中、「菅田八幡宮并神功皇后の縁起の事」に、「正徳甲午六月廿五日、菅田八幡宮并神功皇后の縁起等、新写の巻物の跋に」とあって、大橋龍慶の模写本に言及していることから、正徳四年（一七一四）にこの「模写本」を「新写」したこと、新井白石がその「正徳新写本」を見たことが判明する。

また、和歌山県海草郡野上町小畑の「野上八幡神社蔵」⁽¹¹⁾のものは、慶安元年（一六四八）のもので「石清水八幡宮縁起」を写したものである。

このように、義教奉納「縁起絵」も、「八幡大菩薩縁起絵」とともに流布し、江戸時代に入ってから、「丹緑本」や「奈良絵本」といったコンパクトな形で広がった。特に、「八幡大菩薩縁起絵」は生まれた最初からそうであったように、町絵師によって描かれていったし、「嫁入り道具」の一つとなった。

また、「絵馬」の題材になって、より大衆化した。既に明らかにした⁽¹²⁾ことがあるが、京都・三十三間堂の貞享三年（一六八六）の絵馬は、「犬」譚を題材にした日本でもっとも古いもの。また、京都市左京区鞍馬山の山奥、「峰定寺」の絵馬は、宝暦五年（一七五五）の制作で、「干珠・満珠」譚を素材にしたもので、これまた、もっとも古いものである。

注

(1)『石清水八幡宮史料叢書』二、石清水八幡宮社務所発行

(2)羽曳野市史文化財編別冊『絵巻物集』。外題は「神功皇后縁起」となっている。

(3)『増補 考古画譜』巻九、「八幡縁起絵巻」の項、明治二十二年

(4)国史大系

(5)『統群書類従』第三輯下

(6)東京国立博物館蔵。詞書は『清水寺仮名縁起』『統群書類従』第二十六輯下

(7)滋賀県高月町立歴史民俗資料館蔵

(8)奈良国立博物館編『社寺縁起絵』角川書店

(9)渡辺文雄「伝土佐光茂筆 大分由原八幡宮縁起について」、『大分県立宇佐風土記歴史民俗資料館研究紀要二』。なお、詞書は「統群書類従」第三輯下にある。

(10)『新井白石全集』第五、明治三十九年発行

(11)『神道大系』神社編四十一、紀伊・淡路国、神道大系編集会

(12)拙稿「京都の絵馬と新神功皇后譚」、『京都民俗』第11号、京都民俗学談話会

第四章 豊臣秀吉の朝鮮侵略

室町時代が、「善隣と友好」の時代であり、朝鮮観の「一大転換期」とする見解の誤謬を明らかにしてきた。また、室町時代が、「干珠満珠譚」や「新羅は日本の犬譚」等を内容とする「新神功皇后譚」が広く浸透し、新しい装いをもって「神功皇后の朝鮮観」が定着した時代であることも明らかにした。

当然、秀吉の「朝鮮侵略」は、「善隣友好」の中から生まれた「突然変異的」現象でなく、南北朝や室町期を通じて形成された歴史意識に立脚して、起こされたものであった。

北島万次氏は、「秀吉の朝鮮侵略における神国意識」⁽¹⁾において、秀吉の朝鮮侵略での「神功皇后の伝説」を指摘し、「朝鮮は征服の対象であるという認識」は、「朝鮮渡海の陣立て」時に「持ち込まれ」た、とした。

神功皇后の伝説にあるところの、朝鮮は征服の対象であるという認識は、朝鮮渡海の陣立てを定めるさい秀吉のもとに持ち込まれ、それが日本の神国意識を昂揚させ、大陸出兵の正当性を裏づけていくのである。

そして当然のことながら、この意識は朝鮮に渡海する日本軍のなかに浸透していく。

とし、この「神国意識」については、『朝鮮日々記・高麗日記』⁽²⁾で、

かれらにとって、この神国意識は、朝鮮侵略

における緒戦の勝利のさい、神功皇后の新羅「征伐」の伝説を想起することによって具体化され、自分たちの朝鮮侵略を正当化するイデオロギーとなっていくのである。

ともいっている。

ここには、検討すべき命題が提起されている。一つは、神功伝説の内、「朝鮮は征服の対象」とする認識は、朝鮮侵略準備中の秀吉に持ち込まれた、とする観点。二つは、その結果、神国意識が昂揚し、日本軍の中に浸透し、朝鮮侵略正当化のためのイデオロギーとなった、とする観点である。

まず、侵略直前の事例を通じて、「神功皇后の伝説」の内容を検討してみよう。秀吉一行が、文禄元年（一五九二）三月二十六日に京都を出発し、侵略の総司令部名護屋城へ向かったが、『豊鑑』⁽³⁾に、

日をへて長門の府に至給ふ。こゝの御社は仲哀天皇神功皇后などをあがめ奉り、満干^(マツ)塩の玉など沖の方にふたつの島有。此軍の誓ひ有御神なれば、分て拝し給ふるへし。

とあるように、「忌宮神社」（下関市）に立ち寄り、この「乾珠満珠島」で「軍の誓ひ有御神」神功皇后に祈った。

『大こうさまくんきのうち』⁽⁴⁾によれば、志賀海神社（福岡県志賀島）の神宮寺、吉祥寺の宮司は、秀吉の「御門出」を祝し、「縁起三巻」を「照覧に備え奉」っている。これに、

皇后わづか四十八艘にとりのり、高麗国に至ってご渡海也。異国の大將軍、数万艘漕ぎいたし、火花をふらし、ふせぐ事夥しく、こゝにて皇后、干珠の珠を投げかけ給へば、即時に干潮となる。夷狄船より降り立って、あひ戦ふところに、又満珠の珠を投げ給へば、海上もとのごとく満々と潮満ちきたる。太刀、刀におよはず、水に溺れ、戎敵ことごとく打死する。……高麗の王は、日本の犬也と、皇后弓の弭にて書き付けおかせら

れ、……

とあって、秀吉は、「御本意にたっせらるべき奇瑞、眼前」だとして、「金銀」を与えた。このように、秀吉らに認識された「神功皇后の伝説」の内容が、「干珠満珠譚」や「犬譚」であったことがわかる。

問題は、北島氏が主張するように、これらが朝鮮侵略の「陣立て」中に「持ち込まれた」ものか、「緒戦の勝利」時に「想起」されたものか、どうかである。「忌宮神社」の「乾珠満珠島」については、『八幡愚童訓』甲に、

海上ニ浮ビ出タル二嶋ハ、乾珠満珠ヲ投置給シ所。

とあるように、神功皇后が「乾珠満珠」を、この二嶋に納めた島という伝承が、鎌倉末期にはすでに成立しており、連歌師宗祇の文明十二年（一四八〇）の紀行文『筑紫道行』⁽⁵⁾に、

沖中過る程に、満干る玉とかや言へる二つ嶋を見るにも、韓国^{からくに}の人さへ従ひけん昔有難し。

とあるように、室町時代には、広く知れ渡って⁽⁶⁾いたのである。秀吉一行が偶然思いたって立ち寄ったものではない。

秀吉は文禄二年（一五九三）名護屋城で、世阿弥の「弓八幡」⁽⁷⁾を演じており、その年十月、京都で天皇の前でも演じている⁽⁸⁾。「弓八幡」は、仲哀天皇・神功皇后・応神天皇が祭神の「石清水八幡宮」（京都府八幡市）が舞台であるが、シテの翁の本体は、「高良の神」である。

「高良の神」とは、『愚童訓』甲によれば、龍宮から「干珠満珠」を借りるときの「使者」であり、神功皇后の命令によって、「干珠満珠」を海に投入したとされ、別名「玉垂宮」と呼ばれた神である。

秀吉が、朝鮮侵略を意図したことが確認できる初見資料は、伊予の一柳末安に宛てた、天正十三年（一五八五）九月三日付の「朱印状」⁽⁹⁾であるが、この年、秀吉は「関白」に任じられ

た謝恩として、「弓八幡」以下五番を天皇の「観覧」に供している⁽¹⁰⁾。天正十五年（一五八七）の「島津征伐」時、秀吉は高良山（久留米市）に陣取ったが、ここの高良神社に「掛幅縁起絵」があって、室町時代のものである。このように遅くとも天正十三年頃には、秀吉は「新神功皇后譚」に通じていた。

次に、侵略初期の事例を検討してみる。宿蘆俊岳に侵略時の漢詩集『宿蘆稿』⁽¹¹⁾がある。俊岳は、第七軍毛利輝元の一枝隊・吉川広家軍に従軍、八月十六日に聞慶出発、九月二十八日陽城（漢城）に入っているが、この聞慶から陽城の途中、「忠州」で作詩した漢詩の題詞に、

昔時神功皇后異国欲レ治ニ異国。異国忽レ降、皇后聴焉。自ニ忠州ニ而帰ニ本朝。直以レ弓劃レ石曰、唐土王者日本犬也。至レ今膾ニ炙世俗之人口ニ矣。又今、軍ニ旅忠州、而追ニ憶往事ニ矣。皇后所レ劃之石、今安在哉矣。

のように、ありもしない「皇后所劃之石」を「忠州」で探し求めた。

林羅山の『豊臣秀吉譜』⁽¹²⁾下、慶長二年正月、「唐島」条、戸川肥後守の注に、

又曰、神功皇后以ニ弓弭ニ畫ニ巨石ニ云、高麗王者、吾日本之狗也。

とあり、同じ羅山の『梅村載筆』⁽¹³⁾人巻に、戸川肥後守かたりて云。朝鮮へ入時に、都より一里ばかり外に麗嬬と云所あり。河辺岩石多き内に、二丈ばかりの一石あり。其石面に高麗王者日本国ノ犬也と刻めり。其字大さ一尺ばかりありて、深く切入たり。

麗嬬は釜山浦より九日ほどあるとぞ。

とあり、「麗嬬」での「其石今尚存焉」と現存説を主張し、「世に伝る神功皇后の三韓征討の時にきざめるなるべし」とした。

宿蘆俊岳が「至レ今、膾ニ炙世俗人口ニ矣」といい、戸川肥後守が「世に伝る神功皇后の三韓征討」とするが、これを「朝鮮渡海の陣立て」

の際に持ち込まれ、急に広まった結果と理解するのは不自然であろう。また、緒戦の勝利の際に、突如として「新神功皇后」譚が「想起」されたとするのも、また不自然である。

宿蘆俊岳が「世俗之人口」といい、戸川肥後守が「世に伝る」とすることでわかるように、秀吉の「朝鮮渡海の陣立て」以前から、広く浸透していたことを示しているのである。

豊臣秀吉の朝鮮侵略は、「突然変異的」な現象ではない。それは鎌倉・南北朝・室町期の時間を経て浸透し定着した、「新神功皇后譚」を内容とする「朝鮮観」の思想的反映として、存在する。

豊臣秀吉の朝鮮侵略は、前時代が準備し、侵略を正当化するイデオロギーは、前時代から得たものであって、別個のものとして「切り放して」見るのは、明らかに違いである。

注

- (1)『歴史評論』、No.438、校倉書房
- (2)そして、66ページ
- (3)『群書類従』第二十輯
- (4)汲古書店。一部漢字に変更。
- (5)新日本古典文学大系『中世日記紀行集』
- (6)嘉吉三年の「朝鮮通信使」で来日した、申叔舟の『海東諸国紀』（岩波文庫）日本国紀、長門州、正満に、「長門州乾珠満珠島」とあるが、申叔舟が「乾珠満珠」譚を知っていたかどうかは、不明である。
- (7)岩波文庫『太閤記』巻第十四
- (8)「文禄貳^{癸卯}年^{十月}於禁裏御能組」、『統群書類従』第十九輯下
- (9)岩沢彦彦「秀吉の唐入りに関する文書」、『日本歴史』一九六二年一月号
- (10)『兼見卿記』
- (11)『統群書類従』第十三輯下
- (12)大阪・中之島図書館蔵
- (13)『日本随筆大成』第一期、第一巻、吉川弘文館

さいごに

室町時代を、朝鮮と日本の関係史の上から、「善隣と友好の時代」とする見解を放置できな

い理由は、これが時代規定であるという点にある。

これを認めるならば、室町時代の諸々の歴史的事象、特に、この時代規定に反する歴史的事象は、「善隣と友好の時代」という全体集合の中の、一否定的現象として、瑣末的事象として処理されることになる。

「朝鮮観」を云々する場合、結局は、神功皇后にいきつく。しかし、鎌倉末期以降の「朝鮮観」を理解する場合、『日本書紀』によって得た神功皇后に関する知識を、思い切って捨て去って理解する必要がある。

「新神功皇后侵略譚」は、鎌倉時代の初期から創作されてきたもので、それが最終的に鎌倉末期に『八幡愚童訓』に集大成された。それは、ただちに絵巻（「八幡大菩薩縁起」）となり、民衆画家によって描き続けられ、民衆の中に流布していったところに特徴があった。

夏の風物詩として有名な京都の「祇園祭」の「船鉾」は、「応仁の乱」（一四六七～七七）以前から存在する。大永五年（一五二五）没の土佐光信模写「模本 月次祭礼図」（東京博物館蔵）には、「干珠満珠」を持った安曇磯良が、中央の屋形の中に神功皇后の人形が、それぞれ描かれているし、これ以降の「祇園祭礼図」や「洛中洛外図」には、必ずといってよいほど、「船鉾」が取り上げられた。

このように、「新神功皇后侵略譚」が民衆の段階にまで受容された時代、それが室町時代であった。つまり、「新神功皇后的朝鮮観」は、室町時代に確立し、それ以降の「朝鮮観」を内容的に規定づけたのである。この事実を評価できないところに、室町時代「善隣と友好の時代」説の最大の欠点がある。